

新学力観のための
評価と指導

第I巻

評価で子どもを育てる

横浜国立大学教授

文部省小学校課教科調査官

藤岡 完治 / 北 俊夫

{編}

まえがき

平成9年1月に、文部省は「教育改革プログラム」を発表した。それによると、国民一人ひとりが将来に夢や目標を抱き、創造性とチャレンジ精神を存分に発揮できる社会をつくるために、教育改革を実行するに当たっての基本的な視点を次のように定めている。「我が国の唯一の資源である人材を育成するという視点と同時に、一人一人の子供の個性を尊重しつつ、正義感、思いやり、創造性、国際性をはぐくみ、生涯にわたりその能力を最大限発揮できるようにするという視点が重要である。」

そして、そのためには、教育制度における多様で柔軟な対応を進めるとともに、学校の枠に閉じこもらず、外の世界に大きく眼を向けた、より広い視野からの改革に取り組む、としている。

目下、21世紀を主体的に生きる子どもを育てるため、教育改革のまっただ中である。第十五期中央教育審議会の「第一次答申」は、子ども一人ひとりに「生きる力」をはぐくむことを提言している。これは、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力の育成を重視する、新学力観に立つ教育の理念と軌を一にするものである。すなわち新学力観に立つ教育を一層充実させることが、子どもの「生きる力」の育成につながるものである。

本シリーズ『新学力観のための評価と指導』は、このような基本的な考え方に立つとともに、これまでの各学校での実践を振り返り、理論的な検討を加えながら、評価と指導のあり方を問い直し、子どもの「生きる力」をはぐくむための教師の力量を高めることをめざして刊行するものである。

第I巻『評価で子どもを育てる』は、子どもの豊かな成長をはぐくみ、子どものよさや可能性を見出し伸ばす評価と指導、主体的に「生きる力」を育てる評価と指導など、「子どもを育てる」ことに視点を据えた評価のあり方を中心に構成している。

「子どもを育てる」ということは、子どもをどうとらえるかという子ども観を抜きにして語ることはできない。子ども一人一人は、よさや可能性に満ちた存在であり、そのような子ども観に立ってはじめて、子どもの学びや育ちが見えてくる。子どもは「何もできない。何もわからない」存在としてとらえるとき、そこでは教師の教え込みや子どもを引っ張っていく指導になりやすい。子どもの多様な問題意識や意欲など、本来内在しているよさをどう引き出すか。また、子ども一人一人の学習活動に即して、教師はどう評価し支援するか。ここでの子どもの活動と教師の指導（支援、評価）とのかかわりは、「指導→評価」ではなく、「評価（子ども理

解) →指導」の関係である。

子どもをどう理解するかということは、子どもを育てる出発点である。「初めに子ども理解ありき」——これは、子育ての原則である。また、子どもを育てるためには、教師と保護者と地域社会の住民が、それぞれの役割を果たしながら、互いに連携・協力し合ってかかわっていくことが求められている。

本シリーズ『新学力観のための評価と指導』は、本書『評価で子どもを育てる』のほかに、『評価で授業を変える』と『評価で学校を創る』の全3巻から構成されている。新しい評価と指導の考え方に立って、子どもをとらえ、授業を改善するとともに、新しい学校を創っていくことによって、21世紀を主体的に生きる子どもを育てることができるようになる。本シリーズが、子ども一人ひとりに「生きる力」をはぐくむことを根底に据え、日々の授業を改善し、新しい学校を創るために活用されることを心より願っている。

終わりに、貴重な論説や実践をご提供、ご執筆いただいた先生方に厚くお礼を申しあげるとともに、本シリーズの企画と出版の機会を与えていただいた、(株)ぎょうせいの米澤泰治氏、齋藤健治氏には、心より感謝の意を表したい。

平成9年2月

編著者 藤岡 完治
北 俊夫

序 評価で子どもを育てる

- I 子どもを育てる評価の考え方 1
 - (1) 子どものよさを生かす 1
 - (2) プライドや自信を育てる 2
 - (3) 「生きる力」につなげる 3
 - (4) 自己の育ちにつなげる 4
- II 評価で子どもを育てる工夫 5
 - (1) その子によりそう 5
 - (2) 自然な文脈で評価する 6
 - (3) からだを通す 6
 - (4) かかわりを育てる 7
 - (5) 教師の「からだ」を耕す 8
 - (6) 学校の評価環境を見直す 8
- III おわりに 9

第1章 新学力観に立つ評価の考え方

- 1 新学力観に立つ教育と評価の考え方 11
- I 新学力観に立つ教育の考え方 11
 - (1) ある教頭先生の話 11
 - (2) 新しい教育の考え方とこれからの学習指導 12
- II 新学力観に立つ評価の考え方 13
 - (1) 新しい評価の考え方 13
 - (2) これまでの評価のどこを変えるか 14

目次

2 新学力観に立つ評価と子どもの成長	19
子どもをどうとらえるか——子ども観の確立——	19
(1) 子どもの「よさ」をどうとらえるか	19
(2) 子どもを「発想豊かな存在」としてとらえる	20
II 教師の観察力，洞察力で子どもを読む	22
(1) 子どもの心を読む	22
(2) 教師の確かな観察にまさる評価方法はない	24
III 子どもをとらえる体制づくり	25

第2章 子どものとらえ方・生かし方——新しい子ども理解——

1 新しい子どものとらえ方・生かし方（発達心理学の立場から）	27
人間の要件	27
(1) 知性	28
(2) 感情と感性	28
(3) 意欲と意志	29
(4) 生態学的行為から気づきへ	30
(5) 個人差と個性	31
II 子どもという存在	32
III 学習の基本原則	33
(1) 構成性の原理	33
(2) 状況性の原理	34
(3) 実在性の原理	35
2 新しい子どものとらえ方・生かし方（教育学の立場から）——授業に生き， 子どもを育てる子ども理解——	36
子ども理解の大切さ	36
II 授業という場における教師と子どもとの関係——自己ということとの関係——	36
III 教師による子どもの理解の1つの方法	38
(1) 「わかる・できる・おほえる」を中心とした子ども理解の方法	38
(2) 子どもの成長に基盤を置く子ども理解の方法	38
IV 子ども理解を授業に生かすこととは	40

3	新しい子どものとらえ方・生かし方（社会学の立場から）	44
I	はじめに	44
II	子どもとの関係の転換を	45
	(1) 何が変わったか	45
	(2) 問題はとらえる側に	46
III	多様な子どもの現れを生み出す条件づくりを	47
	(1) 教師の子どもたちへの思いは	47
	(2) 水しぶきとミミズと泥まみれ	48
	(3) 教師の意図を越える子どもの学びのために	49
IV	子どもの生きる世界の変化へのまなざしを	51

第3章 子どもの「生きる力」を育てる評価と指導

1	子どもの関心・意欲を育てる評価と指導	55
	単元にかかわる子どもの実態の把握	55
II	子どもの側に立った指導計画の作成	56
III	発問・助言の重視	58
IV	学習形態の工夫	58
V	評価の工夫	59
2	子どもの思考力・判断力を育てる評価と指導	63
	「生きる力」と思考力・判断力	63
II	指導要録の観点別評価の視点としての思考力・判断力	65
III	思考力・判断力を育てる評価と指導のポイント	67
	(1) 課題意識を確実にもたせる	67
	(2) 学習の過程を重視する	68
	(3) 学習にゆとりをもたせる	68
	(4) 個のよさを生かす評価	68
3	子どもの実践力を育てる評価と指導	70
	実践力豊かな子どもとは	70
	(1) 今、なぜ実践力の育成か	70

目次

(2) 今、子どもに求められている実践力	70
(3) 実践力の形成過程	70
II 教科指導と実践力の育成	71
(1) 実践力のある子どもの姿	71
(2) 実践力を育てるための指導計画の工夫	71
(3) 実践力の評価の仕方について	73
III 特別活動と実践力の育成	74
(1) 特別活動における実践力のとらえ方	74
(2) 実践力を育てるための5つの視点	75
(3) 実践力の具体的な表れ方	75
(4) 実践力の評価について	76
IV 道徳教育と実践力の育成	76
(1) 道徳の時間の指導過程と実践力	77
(2) 道徳の時間の評価について	77
4 子どもの社会性を育てる評価と指導	79
I 変貌する子どもたち	79
(1) 裏通りの駄菓子屋からコンビニエンスへ	79
(2) 都市化と社会性の形成	79
II 子どもの現在と社会性	80
(1) 思いやり行動と生活経験	80
(2) 生活時間の過ごし方と満足度	81
III 社会性を育てる評価と指導	82
(1) 学び合う授業への改善	82
(2) 社会性を育てる授業	84
(3) 他人とのかかわり合いをとらえる評価への改善	85
5 子どもの豊かな人間関係を育てる評価と指導	88
I 子どもの人間関係	88
(1) 子どもの人間関係の様相	88
(2) 人間関係の希薄化のなかでの成長	88
II 子どもの人間関係の発達	89
(1) 幼児期	89

(2) 児童期（小学生期）	90
(3) 中学生期	91
III 豊かな人間関係を培うための資質・能力	91
(1) 基本的な生活習慣を身につける	91
(2) 対人関係調整能力の獲得	92
(3) 集団活動の体験	93
(4) 規範意識を身につける	93
IV 豊かな人間関係を育てるための評価と指導	93
(1) 信頼関係が醸成されているか	94
(2) 人とのかかわり方のルールが守られているか	94
(3) 思いやりいたわる心で行動しているか	95
(4) 時と場にふさわしい行動・態度がとれているか	95
(5) 心の居場所があるか	95
6 子どもの問題解決力を育てる評価と指導	96
I 問題解決力をはぐくむことの大切さ	96
II 切実で具体的な問いを生む	96
(1) 子どもの実態から考える	96
(2) 米の食味試験から問いをもつ	97
III 問題をねばり強く追究する	98
(1) 授業と授業をつなぐ間を大切にする	98
(2) 子どもの追究を評価して返す	100
(3) 子どもの追究を生かす	101
IV 自己評価と追究の発展	104
(1) 自己評価をうながす	104
(2) 自分の生き方に問いかける	105

第4章 子どもに生きる評価と指導

1 子どものよさや可能性を伸ばす評価と指導	107
I 子どもの“よさ”を見る目, 気づく心	107
(1) [関心・意欲・態度]の面から見た育ち方	107

目次

(2) [思考や表現]の面から見た育ち方	110
II 一人ひとりを見守る心の磨き方	113
2 カルテ・座席表を活用した子どもの生かし方	116
I カルテと座席表	116
(1) カルテは教師の評価観を変える	116
(2) 座席表は具体的な個の評価を生む	117
II 授業に生かす	119
(1) 座席表授業案で動く思考を評価する	119
(2) 子どもの変化をとらえて評価する	119
(3) ゆっくりと長く広い眼で見る	121
III 計画は緻密に！ 実践は大胆に！	122
(1) 教師は授業で勝負する	122
(2) 授業と子ども	123
IV 子どもを生かすとは子どもの顔が変わること	126
(1) 受持ちで変わる子どもたちの顔	126
(2) 子どもを生かすとは	127
3 子どもにフィードバックする評価補助簿の開発と活用	129
I 補助簿の意義	129
(1) 評価と指導のとらえ方	129
(2) 評価と指導の一体化と補助簿	129
II 観点別評価と補助簿	130
(1) 子ども全体を見取る評価と補助簿	130
(2) 多面的、多角的評価	131
(3) 評価の段階レベル	131
III 子どもにフィードバックする補助簿	132
(1) 授業前の評価と補助簿	132
(2) 授業中の評価と補助簿	132
(3) 授業間の評価と補助簿	134
(4) 授業後の評価と補助簿	135
(5) 個人カルテ	135
IV 補助簿作成の手順	135

4	子どもを育てる新しい学級経営案の視点	139
I	新しい学級経営	139
II	学級経営案の視点	140
	(1) 子どもの夢を計画化する——子どもの立場にいかにつか——	140
	(2) 学級担任教師のビジョンを具体化する	140
	(3) 子どもの発達を理解する	141
	(4) 学級経営案作成の基本条件を踏まえる	141
III	学級経営案の実例	142
IV	学級経営を推進する12のチェックポイント——学級経営案実践化のために——	144

第5章 保護者とともに子どもを育てる

1	子どもの願いと保護者・教師の役割	149
I	子どもの願い	149
	(1) できるようになりたい	150
	(2) わかるようになりたい	150
	(3) みんなから認められたい	150
II	保護者の役割	151
	(1) 温かい家庭の雰囲気	151
	(2) 「一人前の人間」を自覚させる	152
	(3) 親の欲目が子どもを育てる	153
III	教師の役割	154
	(1) 子どもから好かれる先生	154
	(2) 共存の感情を育てる	155
	(3) 欲目の評価を	156
2	保護者との新しい連携と子どもの育ち	157
I	保護者との新しい連携	157
	(1) 変わる学校の役割	157
	(2) ワンウェイからツーウェイの連携	157
	(3) 新しい連携の「かなめ」は子ども	158
II	連携の基盤となる信頼づくり	159

目 次

(1) 子どもの育ちを創る	159
(2) 参観の授業の充実	162
(3) 保護者会の充実	163
(4) 信頼を得る教師の姿勢	164
Ⅲ ツーウェイの学年・学級だより	165
Ⅳ 信頼と協力のサイクルづくり	166
3 子どもに生きる「連絡帳」活用のアイデア	168
Ⅰ 「連絡帳」は、1つの潤滑油	168
(1) 学校と家庭が手をつなぐ	168
(2) 学校での顔，家庭での顔	168
(3) 信頼関係あつての「連絡帳」	168
(4) よさを見つけ，よさを生かす「連絡帳」	169
Ⅱ 「連絡帳」活用の実践例	170
(1) 「連絡帳」をよい方向に活用できた例——いじめっ子(?)の心のなか あるやさしさ発見! ——	170
(2) 「連絡帳」の活用が，うまくいかなかった例——見て見ぬ振りも，時には 大事? ——	173
Ⅲ 「連絡帳」活用の問題点と意義	174
(1) 「連絡帳」活用の問題点	174
(2) 「連絡帳」活用の意義	175
4 子どもを育てる通知表——その内容と活用——	176
Ⅰ 通知表「くもい」の内容	176
Ⅱ 通知表「くもい」の活用	182
Ⅲ 今後の課題	184
第6章 地域社会で子どもを育てる——新しいネットワーク づくりをめざして——	
1 地域の諸活動との連携・協力	185
Ⅰ 地域との連携・協力の現状をどうとらえるか	185

(1) 従来型の連携	185
(2) 地域の教育力活用型の連携	185
(3) 地域との共生・協働型の連携	186
II ボランティア型活動を中核とした地域との連携・協力を進めたい	189
(1) ボランティア活動による地域との連携・協力——その教育的意義を考える——	190
(2) ボランティア活動による新しいネットワークづくりが地域社会を変容させる——その具体的活動例を考える——	191
(3) まとめ	193
2 地域の諸施設との新しい連携・協力	194
I 子どもの育ちと地域の諸施設との関連	194
(1) 学校教育で活用する地域の諸施設	194
(2) 地域の諸施設を活用する意義と効果	195
(3) 地域の諸施設の教育力に対する期待	196
II 授業における地域の諸施設の活用事例	196
(1) 小学校3年社会・小单元「みんなの公民館」	197
(2) 4年の校外学習の「博物館」利用	199
III 学校と地域の諸施設との連携の要点	200
(1) 子どもと教師への適切な情報提供	200
(2) 学校と諸施設の新しい連携のあり方	201